

宮沢賢治

風の又三郎



風の又三郎

九月一日

どっどど どどうど どどうど どどう

青いくるみも吹きとばせ

すっぱいかりんもふきとばせ

どっどど どどうど どどうど どどう

谷川の岸に小さな学校がありました。

教室はたった一つでしたが生徒は一年から六年までみ

んなありました。運動場もテニスコートのくらいでした
が、すぐうしろは栗の木のあるきれいな草の山でしたし、
運動場の隅にはごぼごぼつめたい水を噴く岩穴もあつた
のです。

さわやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと
鳴り、日光は運動場いっぱいでした。黒い雪袴ゆきばかまをはい
た二人の一年生の子がどてをまわって運動場にはいつて
来て、まだほかに誰もたれ来ていないのを見て

「ほう、おら一等だぞ。一等だぞ。」とかわるがわる叫
びながら大悦おおよろこで門をはいつて来たのでしたが、ちよつ

と教室の中を見ますと、二人ともまるでびっくりして棒立ちになり、それから顔を見合せてぶるぶるふるえましました。がひとりはどうとう泣き出してしまいました。というわけは、そのしんとした朝の教室のなかにどこから来たのか、まるで顔も知らないおかしな赤い髪の子供がひとり、一番前の机にちゃんと座っていたのです。そしてその机といったらまったくこの泣いた子の自分の机だったのです。もひとりの子ももう半分泣きかけていましたが、それでもむりやり目をりんと張ってそっちの方をにらめていましたら、ちようどそのとき川上から

「ちようはあかぐり　ちようはあかぐり」と高く叫ぶ声
がしてそれからまるで大きな鳥のように、嘉助かすけが、かば
んをかかえてわらって運動場へかけて来ました。と思っ
たらすぐそのあとから佐太郎だの耕助だのどやどややっ
てきました。

「なして泣いでら、うなかもたのが。」嘉助が泣かない
こどもの肩をつかまえて云いました。するとその子もわ
あと泣いてしまいました。おかしいとおもってみんなが
あたりを見ると教室の中にあの赤毛のおかしな子がすま
してしやんとすわっているのが目につきました。みんな

はしんとなつてしまいました。だんだんみんな女の子たちも集つて来ましたが、誰も何とも云えませんでした。

赤毛の子どもは一向こわがる風もなくやつぱりちやんと座つてじつと黒板を見えています。

すると六年生の一郎が来ました。一郎はまるでおとなのようにゆっくり大またにやつてきて、みんなを見て、「何した。」とききました。みんなははじめてがやがや声をたててその教室の中の変な子を指さしました。一郎はしばらくそつちを見ていましたが、やがて鞆かばんをしっかりかかえてさつさと窓の下へ行きました。

みんなもすっかり元気になってついて行きました。

「誰だ、^{たれ}時間にならないに教室へはいつてるのは。」一郎は窓へはいのぼって教室の中へ顔をつき出して云いました。

「お天氣のいい時教室さ入ってるづど先生にうんと叱らせるぞ。」窓の下の耕助が云いました。

「叱らえでもおら知らないよ。」嘉助が言いました。

「早く出はって来、出はって来」一郎が云いました。けれどもそのこどもはきよろきよろ室の中や^{へや}みんなの方を見るばかりで、やっぱりちゃんとひざに手をおいて腰掛

けに座っていました。

ぜんたいその形からが実におかしいのでした。変てこな鼠いろのだぶだぶの上着を着て、白い半ずぼんをはいて、それに赤い革の半靴をはいていたのです。それに顔と云ったらまるで熟した苹果りんごのよう、殊に目はまん円でまっくろなものでした。一向語ことばが通じないようなので一郎も全く困ってしまいました。

「あいつは外国人だな」「学校さ入るのだな。」みんなはがやがやがやがや云いました。ところが五年生の嘉助がいきなり

「ああ三年生さ入るのだ。」と叫びましたので、「ああ
そうだ。」と小さいこどもらは思いましたが一郎はだま
ってくびをまげました。

変なこどもはやはりきよろきよろこつちを見るだけき
ちんと腰掛けています。

そのとき風がどうと吹いて来て教室のガラス戸はみんな
ながたがた鳴り、学校のうしろの山の萱かやや栗の木はみんな
変に青じろくなくなってゆれ、教室のなかのこどもは何だ
かにやっとならわらってすこしうごいたようでした。すると
嘉助がすぐ叫びました。

「ああわかったあいつは風の又三郎だぞ。」

そうだつとみんなもおもったとき俄にわかにうしろの方で五郎が

「わあ、痛いじゃあ。」と叫びました。みんなそっちへ振り向きますと五郎が耕助に足のゆびをふまれてまるで怒って耕助をなぐりつけていたのです。すると耕助も怒って

「わあ、われ悪くてでひと撲はだいだなあ。」と云ってまた五郎をなぐろうとしました。五郎はまるで顔中涙だらけにして耕助に組み付こうとしました。そこで一郎が間へ

はいつて嘉助が耕助を押えてしまいました。

「わあい、喧嘩するなったら、先生あちやんと職員室に
来てらぞ。」と一郎が云いながらまた教室の方を見まし
たら一郎は俄かにまるでぽかんとしてしまいました。た
ったいままで教室にいたあの変な子が影もかたちもない
のです。みんなもまるでせつかく友達になつた子うまが
遠くへやられたよう、せつかく捕つた山雀やまがらに逃げられた
ように思いました。

風がまたどうと吹いて来て窓ガラスをがたがた云わせ
うしろの山の萱をだんだん上流の方へ青じろく波だてて

行きました。

「わあうなだ喧嘩したんだがら又三郎居なくなつたな。」嘉助が怒つて云いました。みんなもほんとうにそう思いました。五郎はじつに申し訳ないと思つて足の痛いのも忘れてしよんぼり肩をすぼめて立つたのです。

「やっぱりあいつは風の又三郎だつたな。」

「二百十日で来たのだな。」

「靴はいでだたぞ。」

「服も着でだたぞ。」

「髪赤くておかしやづだつたな。」

「ありやありや、又三郎おれの机の上さ石かけ乗せでつたぞ。」二年生の子が云いました。見るとその子の机の上には汚ない石かけが乗っていたのです。

「そうだ、ありや。あそこのガラスもぶつかしたぞ。」

「そだないであ。あいづあ休み前に嘉助石ぶっつけだのだな。」

「わあい。そだないであ。」

と云っていたときこれはまた何という訳でしょう。先生が玄関から出て来たのです。先生はぴかぴか光る呼子を右手にもってもう集れの仕度をしているのでした。そ

のすぐうしろから、さっきの赤い髪の子が、まるで権現ごんげんさまの尾っぱ持ちのようにすまし込んで、白いシャツポをかぶって先生についてすばすばとあるいて来たのです。

みんなはしいんとなつてしまいました。やっと一郎が「先生お早うございます。」と云いましたのでみんなもついて「先生お早うございます。」と云っただけでした。

「みなさん。お早う。どなたも元気ですね。では並んで。」先生は呼子をビルルと吹きました。それはすぐ谷の向うの山へひびいてまたビルルと低く戻ってきまし

た。

すっかりやすみの前の通りだとみんなが思いながら六年生は一人、五年生は七人、四年生は六人、三年生は十人、組ごとに一列に縦にならびました。

二年は八人一年生は四人前へならえをしてならんだのです。するとその間あのおかしな子は、何かおかしいのかおもしろいのか奥歯で横っちよに舌を噛むようにしてじろじろみんなを見ながら先生のうしろに立っていたのです。すると先生は、高田さんこっちへおはいりなさいと云いながら五年生の列のところへ連れて行って丈を嘉

助とくらべてから嘉助とそのうしろのきよの間へ立たせました。みんなはふりかえってじつとそれを見ていました。先生はまた玄関の前に戻って

前へならえと号令をかけました。

みんなはもう一ぺん前へならえをしてすっかり列をつくりましたがじつはあの変な子がどういう風になっているのか見たくてかわるがわるそつちをふりむいたり横眼でにらんだりしたのでした。するとその子はちゃんと前へならえでもなんでも知ってるらしく平気で両腕を前へ出して指さきを嘉助のせなかへやっとなぐくくらしいにしてい

たものですから嘉助は何だかせなかがかゆくすぐつた
いという風にもじもじしていました。

「直れ」先生がまた号令をかけました。

「一年から順に前へおい。」

そこで一年生はあるき出しまもなく二年も三年もある
き出してみんなの前をぐるっと通って右手の下駄箱のあ
る入口に入って行きました。四年生があるき出すとさつ
きの子も嘉助のあとへついて大威張りであるいて行きま
した。前へ行った子もときどきふりかえって見、あとの
ものもじっと見ていたのです。

まもなくみんなははきものを下駄箱に入れて教室へ入って、ちようど外へならんだときのようにならんに一列に机に座りました。さっきの子もすまし込んで嘉助のうしろに座りました。ところがもう大さわぎです。

「わあ、おらの机代ってるぞ。」

「わあ、おらの机さ石かけ入ってるぞ。」

「キツコ、キツコ、うな通信簿持って来たが。おら忘れて来たじゃあ。」

「わあい、さの、木ペン借せ、木ペン借せたら。」

「わあがない。ひとの雑記帳とってって。」

そのとき先生が入って来ましたのでみんなもさわぎながらとにかく立ちあがり一郎がいちばんうしろで「礼」と云いました。

みんなはおじぎをする間はちよつとしんとなりましたがそれから又がやがやがやがや云いました。

「しずかに、みなさん。しずかにするのです。」先生が云いました。

「叱しつ、悦治、やがましつたら、嘉助え、喜こつこう。わあい。」と一郎がいちばんうしろからあまりさわぐものを一人ずつ叱しりました。

みんなはしんとなりました。先生が云いました。

「みなさん長い夏のお休みは面白かったですね。みなさんは朝から水泳ぎもできたし林の中で鷹にも負けないくらい高く叫んだりまた兄さんの草刈りについて上の野原へ行ったりしたでしょう。けれどももう昨日で休みは終了しました。これからは第二学期で秋です。むかしから秋は一番からだもこころもひきしまつて勉強のできる時だといつてあるのです。ですから、みなさんも今日から又いっしょにしっかり勉強しましょう。それからこのお休みの間にみなさんのお友達が一人ふえました。それはそ

ここに居る高田さんです。その方のお父さんはこんど会社のご用で上の野原の入り口へおいでになっ
ていられるのです。高田さんはいままで
は北海道の学校に居られたのですが今日
からみなさんのお友達になるのですから、
みなさんは学校で勉強のときも、また栗
拾いや魚とりに行くときも高田さんを
さそうようにしなければなりません。わ
かりましたか。わかった人は手をあげて
ごらんなさい。」

すぐみんなは手をあげました。その高
田とよばれた子も勢よく手をあげまし
たので、ちよつと先生はわらいま

したがすぐ、

「わかりましたね、ではよし。」と云いましたのでみんなは火の消えたように一ぺんに手をおろしました。

ところが嘉助がすぐ「先生。」といつてまた手をあげました。

「はい、」先生は嘉助を指さしました。

「高田さん名は何て云うべな。」

「高田三郎さんです。」

「わあ、うまい、そりや、やっぱり又三郎だな。」嘉助はまるで手を叩いてたた机の中で踊るようにしましたので、

大きな方の子どもらはどつと笑いしましたが三年生から下の子どもらは何か怖いという風にしいんとして三郎の方を見ていたのです。先生はまた云いました。

「今日はみなさんは通信簿と宿題をもってくるのでしたね。持って来た人は机の上へ出してください。私がいま集めに行きますから。」

みんなはばたばた鞆をあけたり風呂敷をといたりして通信簿と宿題帖を机の上に出しました。

そして先生が一年生の方から順にそれを集めはじめました。そのときみんなはぎよつとしました。という訳は

みんなのうしろのところ^にいつか一人の大人が立っていたのです。その人は白いだぶだぶの麻服を着て黒いてかてかした半巾^{はんけち}をネクタイの代りに首に巻いて手には白い扇をもって軽くじぶんの顔を扇^{あお}ぎながら少し笑ってみんなを見おろしていたのです。さあみんなはだんだんしいんとなつてまるで堅くなつてしまいました。ところが先生は別にその人を気にかける風もなく順々に通信簿を集めて三郎の席まで行きますと三郎は通信簿も宿題帖もない代りに両手をにぎりこぶしにして二つ机の上^にのせていたのです。先生はだまつてそこを通りすぎ、みんなの

を集めてしまおうとそれを両手でそろえながらまた教壇に戻りました。

「では宿題帖はこの次の土曜日に直して渡しますから、今日持って来なかった人は、あしたきつと忘れないで持って来てください。それは悦治さんとコージさんとリョウサクさんですね。では今日はここまでです。あしたからちゃんといつも通りの仕度をしてお出でなさい。それから五年生と六年生の人は、先生といっしよに教室のお掃除をしましょう。ではここまで。」

一郎が気を付けと云いみんなは一ぺんに立ちました。

うしろの大人も扇を下にさげて立ちました。

「礼。」先生もみんなも礼をしました。うしろの大人も軽く頭を下げました。それからずっと下の組の子どもらは一目散に教室を飛び出しましたが四年生の子どもらはまだもじもじしていました。

すると三郎はさっきのだぶだぶの白い服の人のところへ行きました。先生も教壇を下りてその人のところへ行きました。ききました。

「いやどうもご苦労さまでございます。」その大人はいいねいに先生に礼をしました。

「じきみんなとお友だちになりますから、」先生も礼を返しながら云いました。

「何分どうかよろしくおねがいたします。それで。」その人はまたていねいに礼をして眼で三郎に合図すると自分は玄関の方へまわって外へ出て待っていますと三郎はみんなの見ている中を眼をりんとはってだまっで昇降口から出て行って追いつき二人は運動場を通って川下の方へ歩いて行きました。

運動場を出るときその子はこっちをふりむいてじつと学校やみんなの方をにらむようにするとまたすたすた白

服の大人について歩いて行きました。

「先生、あの人は高田さんのお父さんですか。」一郎が
箒ほうきをもちながら先生にききました。

「そうです。」

「何の用で来たべ。」

「上の野原の入口にモリブデンという鉱石ができるの
で、それをだんだん掘るようにする為だそうです。」

「どこらあたりだべな。」

「私もまだよくわかりませんが、いつもみなさんが馬を
つれて行くみちから少し川下へ寄った方なようです。」

「モリブデン何にするべな。」

「それは鉄とまぜたり、薬をつくったりするのだそうです。」

「そしたら又三郎も掘るべが。」 嘉助が云いました。

「又三郎だない。高田三郎だじゃ。」 佐太郎が云いました。

「又三郎だ又三郎だ。」 嘉助が顔をまっ赤にしてがん張りしました。

「嘉助、うなも残ってらば掃除してすけろ。」 一郎が云いました。

「わあい。やんたじや。きよう五年生ど六年生だな。」
嘉助は大急ぎで教室をはねだして遁^にげてしまいました。
た。

風がまた吹いて来て窓ガラスはまたがたがた鳴り雑巾^{ぞうきん}
を入れたバケツにも小さな黒い波をたてました。

九月二日

次の日一郎はあのおかしな子供が今日からほんとうに
学校へ来て本を読んだりするかどうか早く見たいような

気がしていつもより早く嘉助をさそいました。ところが嘉助の方は一郎よりもっとそう考えていたと見えてとうにごはんもたべふろしきに包んだ本ももって家の前へ出て一郎を待っていたのでした。二人は途中もいろいろその子のことを談はなしながら学校へ来ました。すると運動場には小さな子供らがもう七八人集っていて棒かくしをしていました。その子はまだ来ていませんでした。また昨日のように教室の中に居るのかと思つて中をのぞいて見ましたが教室の中はしいんとして誰たれも居ず黒板の上には昨日掃除のとき雑巾で拭いた痕あとが乾いてぼんやり白い縞

になつていました。

「昨日のやつまだ来てないな。」一郎が云いました。

「うん」嘉助も云つてそこらを見まわしました。

一郎はそこで鉄棒の下へ行つてじやみ上りというやり方で無理やりに鉄棒の上へのぼり両腕をだんだん寄せて右の腕木に行くとそこへ腰掛けて昨日又三郎の行つた方をじつと見おろして待つていました。谷川はそつちの方へきらきら光つてながれて行きその下の山の上の方では風も吹いているらしくときどき萱かやが白く波立っていました。嘉助もやっぱりその柱の下でじつとそつちを見て待

っていました。ところが二人はそんなに長く待つこともありませんでした。それは突然又三郎がその下手のみちから灰いろの鞆を右手にかかえて走るようにして出て来たのです。

「来たぞ」と一郎が思わず下に居る嘉助へ叫ぼうとしていますと早くも又三郎はどてをぐるっとまわってどんどん正門を入って来ると

「お早う。」とはつきり云いました。みんなはいっしょにそっちをふり向きましたが一人も返事をしたものがありませんでした。それはみんなは先生にはいつでも「お

早うございます」というように習っていたのですがお互いに「お早う」なんて云ったことがなかったのに又三郎にそう云われても一郎や嘉助はあんまりにわかで又勢がよいのでとうとう臆してしまつて一郎も嘉助も口の中でお早うというかわりにもにやもにやつと云つてしまったのでした。ところが又三郎の方はべつだんそれを苦にする風もなく二三歩又前へ進むとじつと立ってそのまっ黒な眼でぐるつと運動場じゆうを見まわしました。そしてしばらく誰か遊ぶ相手がないかさがしているようでした。けれどもみんななきよろきよろ又三郎の方は見えて

ももじもじしてやはり忙しそうに棒かくしをしたり又三郎の方へ行くものがありました。又三郎はちよつと工合が悪いようにそこにつつ立っていました。又運動場をもう一度見まわしました。それからぜんたいこの運動場は何間あるかというように、正門から玄関まで大股に歩数を数えながら歩きはじめました。一郎は急いで鉄棒をはねおりて嘉助とならんで息をこらしてそれを見ていました。

そのうち又三郎は向うの玄関の前まで行ってしまふとこつちへ向いてしばらく暗算あんざんをするように少し首をまげ

て立っていました。

みんなはやはりきろきろそつちを見えています。又三郎は少し困ったように両手をうしろへ組むと向う側の土手の方へ職員室の前を通って歩きだしました。

その時風がざあつと吹いて来て土手の草はざわざわ波になり運動場のまん中でさあつと塵ちりがあがりそれが玄関の前まで行くときりきりとまわって小さなつむじ風になって黄いろな塵は瓶をさかさまにしたような形になって屋根より高くのぼりました。すると嘉助が突然高く云いました。

「そうだ。やっぱりあいづ又三郎だぞ。あいづ何かするときつと風吹いてくるぞ。」

「うん。」一郎はどうだかわからないと思ひながらもだまっつてそつちを見ていました。又三郎はそんなことにはかまわず土手の方へやはりすたすた歩いて行きます。

そのとき先生がいつものように呼子をもつて玄関を出て来たのです。

「お早うございます。」小さな子どもらははせ集りました。

「お早う。」先生はちらつと運動場を見まわしてから「で

はならんで。」と云いながらプルルツと笛を吹きました。

みんなは集ってきて昨日のとおりきちんとならびました。又三郎も昨日云われた所へちやんと立っています。

先生はお日さまがまっ正面なのですこしまぶしそうにしながら号令をだんだんかけてとうとうみんなは昇降口から教室へ入りました。そして礼がすむと先生は

「ではみなさん今日から勉強をはじめましょう。みなさんはちやんとお道具をもってきましたね。では一年生と二年生のお習字のお手本と硯すずりと紙を出して、三年生と四年生のお算術帳と雑記帳と鉛筆を出して五年生

と六年生の方は国語の本を出してください。」

さあするとあつちでもこつちでも大さわぎがはじまりました。中にも又三郎のすぐ横の四年生の机の佐太郎がいきなり手をのばして三年生のかよの鉛筆をひらりととってしまったのです。かよは佐太郎の妹でした。するとかよは

「うわあ、兄あいな、木ペン取てわかんないな。」と云いながら取り返そうとしますと佐太郎が

「わあ、こいつおれのだなあ。」と云いながら鉛筆をふところの中へ入れてあとは支那人がおじぎするときのよ

うに両手を袖そでへ入れて机へぴったり胸をくつつけました。するとかよは立って来て、

「兄な、兄なの木ペンは一昨日おととい小屋で無くしてしまったけなあ。よこせったら。」と云いながら一生けん命とり返そうとしましたがどうしてももう佐太郎は机にくっついた大きな蟹かにの化石みたいになっているのでとうとうかよは立ったまま口を大きくまげて泣きだしそうになりました。すると又三郎は国語の本をちゃんと机にのせて困ったようにしてこれを見ていましたがかよがとうとうぼろぼろ涙をこぼしたのを見るとだまって右手に持ってい

た半分ばかりになった鉛筆を佐太郎の目の前の机に置き
ました。すると佐太郎はにわかになんか元気になってむっくり
起き上がりました。そして「呉れる？」と又三郎にきき
ました。又三郎はちよつとまごついたようでしたが覚悟
したように「うん」と云いました。すると佐太郎はいき
なりわらい出してふところの鉛筆をかよの小さな赤い手
に持たせました。

先生は向こうで一年生の子の硯に水をついでやったり
していましたが嘉助は又三郎の前ですから知りませんで
したが一郎はこれをいちばんうしろでちゃんと見ていま

した。

そしてまるで何と云ったらいいかわからない変な気持ち
ちがして歯をきりきり云わせました。

「では三年生のひとはお休みの前にならった引き算をも
う一ぺん習ってみましょう。これを勘定してごらんなさ
い。」先生は黒板に $\frac{25}{-12}$ と書きました。三年生のこども
らはみんな一生けん命にそれを雑記帖にうつしました。
かよも頭を雑記帖へくっつけるようにして書いていま
す。

「四年生の人はこちらを置いて」 $\frac{17}{\times 4}$ と書きました。四年

生は佐太郎をはじめ喜蔵も甲助もみんなそれをうつしました。

「五年生の人は読本の「二字空白」頁の「一字不明」課をひらいて声をたてないで読めるだけ読んでごらん下さい。わからない字は雑記帖へ拾って置くのです。」

五年生もみんな云われたとおりしはじめました。

「一郎さんは読本の「一字空白」頁をしらべてやはり知らない字を書き抜いてください。」

それがすむと先生はまた教壇を下りて一年生と二年生の習字を一人一人見てあるきました。又三郎は両手で本

をちやんと机の上へもって云われたところを息もつかずじつと読んでいました。けれども雑記帖へは字を一つも書き抜いていませんでした。それはほんとうに知らない字が一つもないのかたった一本の鉛筆を佐太郎にやってしまったためかどっちともわかりませんでした。

そのうち先生は教壇へ戻って三年生と四年生の算術の計算をして見せてまた新らしい問題を出すと今度は五年生の生徒の雑記帖へ書いた知らない字を黒板へ書いてそれにかたとわけをつけました。そして

「では嘉助さんここを読んで。」と云いました。嘉助は

二三度ひっかかりながら先生に教えられて読みました。

又三郎もだまって聞いていました。先生も本をとってじつと聞いていました。が十行ばかり読むと

「そこまで」と云ってこんどは先生が読みました。

そうして一まわり済むと先生はだんだんみんなの道具をしまわせました。それから

「ではここまで」と云って教壇に立ちますと一郎がうしろで

「気をつけい」と云いました。そして礼がすむとみんな順に外へ出てこんどは外へならばずにみんな別れ別れに

なって遊びました。

二時間目は一年生から六年生までみんな唱歌でした。そして先生がマンドリンを持って出て来てみんなはいままでに唄ったのを先生のマンドリンについて五つもうたいました。

又三郎もみんな知っていてみんなどんどん歌いました。そしてこの時間は大へん早くたってしまいました。

三時間目になるとこんどは三年生と四年生が国語で五年生と六年生が数学でした。先生はまた黒板に問題を書いて五年生と六年生に計算させました。しばらくたって

一郎が答えを書いてしまおうと又三郎の方うをちよつと見ました。すると又三郎は、どこから出したか小さな消し炭で雑記帖の上へがりがりとき大きく運算していたのです。

九月四日、日曜

次の朝空はよく晴れて谷川はさらさら鳴りました。一郎は途中で嘉助と佐太郎と悦治をさそって一緒に三郎のうちの方へ行きました。学校の少し下流で谷川をわたつ

て、それから岸で楊やなぎの枝をみんなで一本ずつ折って青い皮をくるくる剥はいで鞭むちを拵こしらえて手でひゅうひゅう振りながら上の野原への路をだんだんのぼって行きました。みんなは早くも登りながら息をはあはあしました。

「又三郎ほんとにあそこのわき水まで来て待ちでるべが。」

「待ちでるんだ。又三郎偽うそこがないもな。」

「ああ暑う、風吹けばいいな。」

「どごがらだが風吹いでるぞ。」

「又三郎吹がせでらべも。」

「なんだがお日さんぼやっとして来たな。」

空に少しばかりの白い雲が出ました。そしてもう大分のぼっていました。谷のみんなの家がずうっと下に見え、一郎のうちの木小屋の屋根が白く光っています。

路が林の中に入り、しばらく路はじめじめして、あたりは見えなくなりました。そしてまもなくみんなは約束のわき水の近くに来ました。するとそこから

「おうい。みんな来たかい。」と三郎の高く叫ぶ声がしました。

みんなはまるでせかせかと走ってのぼりました。向う

の曲り角の処に又三郎が小さな唇をきつと結んだまま三人のかけ上つて来るのを見ていました。三人はやつと三郎の前まで来ました。けれどもあんまり息がはあはあしてすぐには何も云えませんでした。嘉助などはあんまりもどかしいもんですから、空へ向いて

「ホッホウ。」と叫んで早く息を吐いてしまおうとしました。すると三郎は大きな声で笑いました。

「ずいぶん待ったぞ。それに今日は雨が降るかもしれないそうだよ。」

「そだら早く行くべすさ。おらまんつ水飲んでぐ。」

三人は汗をふいてしゃがんでまっ白な岩からごぼごぼ噴きだす冷たい水を何べんも掬すくつてのみました。

「ぼくのうちはここからすぐなんだ。ちようどあの谷の上あたりなんだ。みんなで帰りに寄ろうねえ。」

「うん。まんつ野原さ行くべすさ。」

みんなが又あるきはじめたとき湧水は何かを知らせるようにぐうつと鳴り、そこらの樹もなんだかざあつと鳴ったようでした。

五人は林のすその藪の間を行ったり岩かけの小さく崩れる所を何べんも通ったりしてもう上の野原の入り口に

近くなりました。

みんなはそこまで来ると来た方からまた西の方をながめました。光ったり陰ったり幾通りにも重なったたくさんの丘の向うに川に沿ったほんとうの野原がぼんやり碧あおくひろがっているのです。

「ありや、あいづ川だぞ。」

「春日明神さんの帯のようだな。」又郎が言いました。

「何のようだぞ。」一郎がききました。

「春日明神さんの帯のようだ。」

「うな神さんの帯見だごとあるが。」

「ぼく北海道で見たよ。」

みんなはなんのことだかわからずだまってしまいました。
た。

ほんとうにそこはもう上の野原の入り口で、きれいに刈られた草の中に一本の巨おおきな栗の木が立ってその幹は根もとの所がまっ黒に焦げて巨おおきな洞ほらのようになり、その枝には古い縄や、切れたわらじなどがつるしてありました。

「もう少し行ぐづどみんなして草刈ってるぞ。それから馬の居るどごもあるぞ。」 一郎は云いながら先に立って

刈った草のなかの一ぼんみちをぐんぐん歩きました。

三郎はその次に立って、

「ここには熊居ないから馬をはなしておいてもいいなあ。」と云って歩きました。

しばらく行くとみちばたの大きな櫛ならの木の下に、縄で編んだ袋が投げ出してあって、沢山の草たばがあっちにもこつちにもころがっていました。

せなかに「約二字分空白」をしよった二匹の馬が、一郎を見て、鼻をふるふる鳴りました。

「兄あいな、居るが。兄な、来たぞ。」一郎は汗を拭いなが

ら叫びました。

「おおい。ああい。其処に居ろ。今行くぞ。」

ずうっと向うの窪みで、一郎の兄さんの声がしました。陽がぱつと明るくなり、兄さんがそっちの草の中から笑って出て来ました。

「善^ゆぐ来たな。みんなも連れで来たのが。善^ゆぐ来た。戻りに馬こ連れでてけるな。今日あ^{ひる}午まがらきつと曇る。俺^{おら}もう少し草集めて仕^し舞^むがらな、うなだ遊^{あそ}ばばあの土手の中さ入ってる。まだ牧馬の馬二十^{ひき}疋ばかりは居るがらな。」

兄さんは向うへ行こうとして、振り向いて又云いました。

「土手がら外さ出はるなよ。迷ってしまうづど危ないがらな。午まになつたら又来るがら。」

「うん。土手の中に居るがら。」

そして一郎のにいさんは行ってしまいました。空にはうすい雲がすっかりかかり、太陽は白い鏡のようになって、雲と反対に馳はせました。風が出て来てまだ刈っていない草は一面に波を立てます。一郎はさきにたつて小さなみちをまっすぐに行くともまもなくどてになりました。

その土手の一とこちぎれたところに二本の丸太の棒を横にわたしてありました。耕助がそれをくぐろうとしますと、嘉助が

「おらこったなもの外せだだど。」と云いながら片つ方ははじめをぬいて下におろしましたのでみんなはそれをはね越えて中に入りました。向うの少し小高いところにてかてか光る茶いろの馬が七疋ばかり集まってしっぽをゆるやかにばしやばしやふっているのです。

「この馬みんな千円以上するづもな。来年がらみんな競馬さも出はるのだづじやい。」一郎はそばへ行きながら

云いました。

馬はみんないままでさびしくって仕様なかつたというように一郎たちの方へ寄ってきました。

そして鼻づらをずうつとのばして何かほしそうにするのです。

「ははあ、塩をけるづのだな。」みんなは云いながら手を出して馬になめさせたりしましたが三郎だけは馬になれていないらしく気味悪そうに手をポケットへ入れてしまいました。

「わあ又三郎馬怖おっかながるじやい。」と悦治が云いまし

た。すると三郎は、

「怖くなんかないやい。」と云いながらすぐポケットの手を馬の鼻づらへのばしましたが馬が首をのばして舌をべろりと出すとさあっと顔いろを変えてすばやくまた手をポケットへ入れてしまいました。

「わあい、又三郎馬怖ながるじやい。」悦治が又云いました。すると三郎はすっかり顔を赤くしてしばらくもじもじしていましたが、

「そんなら、みんなで競馬やるか。」と云いました。競馬ってどうするのかとみんな思いました。

すると三郎は、

「ぼく競馬何べんも見たぞ。けれどもこの馬みんな鞍くらがないから乗れないや。みんなで一疋ずつ馬を追ってはじめに向うの、そら、あの巨おおきな樹のところに着いたものを一等にしよう。」

「そいづ面白いな。」嘉助が云いました。

「叱らえるぞ。牧夫に見つ付らえでがら。」

「大丈夫だよ。競馬に出る馬なんか練習をしていないといけないんだい。」三郎が云いました。

「よしおらこの馬だぞ。」

「おらこの馬だ。」

「そんならぼくはこの馬でもいいや。」

みんなは楊やなぎの枝や萱かやの穂でしゅうと云いながら馬を軽く打ちました。ところが馬はちっともびくともしませませんでした。やはり下へ首をたれて草をかいだり首をのばしてそこらのけしきをもつとよく見るというようにしているのです。

一郎がそこで両手をびしやんと打ち合わせて、だあと云いました。すると俄にわかに七疋ともまるでたてがみをそろえてかけ出したのです。

「うまあい。」嘉助ははね上って走りました。けれどもそれはどうも競馬にはならないのでした。第一馬はどこまでも顔をならべて走るのでしたしそれにそんなに競馬するくらい早く走るのでもなかったのです。それでもみんなは面白がってだあだと云いながら一生けん命そのあとを追いました。

馬はすこし行くと立ちどまりそうになりました。みんなもすこしはあはあしましたがこらえてまた馬を追いました。するといつか馬はぐるっとさっきの小高いところをまわって、さっき五人ではいつて来たどての切れた所

へ来たのです。

「あ、馬出はる、馬出はる。押えろ 押えろ。」

一郎はまっ青になって叫びました。じっさい馬はどての外へ出たのらしいのでした。どンドン走ってもうさっきの丸太の棒を越えそうになりました。一郎はまるであわてて、「どうどうどうどう。」と云いながら一生懸命走って行ってやっところへ着いてまるでころぶようにしながら手をひろげたときはもう二足は外へ出ていたのでした。

「早く来て押えろ。早く来て。」一郎は息も切れるよう

に叫びながら丸太棒をもとのようにしました。四人は走って行って急いで丸太をくぐって外へ出ますと、二疋の馬はもう走るでもなくどての外に立って草を口で引っぱって抜くようにしています。

「そろそろど押えろよ。そろそろど。」と云いながら一郎は一びきのくつわについた札のところをしっかり押えました。嘉助と三郎がもう一疋を押えようとそばへ寄りますと馬はまるで愕おどろいたようにどてへ沿って一目散に南の方へ走ってしまいました。

「兄あいな馬あ逃げる、馬あ逃げる。兄な。馬逃げる。」と

うしろで一郎が一生けん命叫んでいます。三郎と嘉助は一生けん命馬を追いました。

ところが馬はもう今度こそほんとうに遁にげるつもりらしかつたのです。まるで丈ぐらいある草をわけて高みになったり低くなったりどこまでも走りました。

嘉助はもう足がしびれてしまつてどこをどう走っているのかわからなくなりました。

それからまわりがまっ蒼になつて、ぐるぐる廻り、とうとう深い草の中に倒れてしまいました。馬の赤いたてがみとあとを追って行く三郎の白いシャツポが終りにち

らっと見えました。

嘉助は、仰向けになつて空を見ました。空がまっ白に光つて、ぐるぐる廻り、そのこちらを薄い鼠色の雲が、速く速く走っています。そしてカンカン鳴っています。

嘉助はやっと起き上つて、せかせか息しながら馬の行つた方に歩き出しました。草の中には、今馬と三郎が通つた痕あとらしく、かすかな路のようなものがありました。

嘉助は笑いました。そして、

（ふん、なあに馬何処かで、こわくなつてのっこり立ってるさ。）と思ひました。

そこで嘉助は、一生懸命それを跡^つけて行きました。ところがその路のようなものは、まだ百歩も行かないうちに、おとこえしや、すてきに背の高い薊^{あざみ}の中で、二つにも三つにも分かれてしまつて、どれがどれやら一向わからなくなつてしまいました。嘉助はおういと叫びました。

おうとどこかで三郎が叫んでいるようです。思い切つて、そのまん中のを進みました。けれどもそれも、時々断^きれたり、馬の歩かないような急な所を横様に過ぎたりするのです。

空はたいへん暗く重くなり、まわりがぼうつと霞んで来ました。冷たい風が、草を渡りはじめ、もう雲や霧が、切れ切れになって眼の前をぐんぐん通り過ぎて行きました。

（ああ、こいつは悪くなって来た。みんな悪いことはこれから集たかってやって来るのだ。）と嘉助は思いました。全くその通り、俄にわかに馬の通った痕あとは草の中で無くなってしまいました。

（ああ、悪くなった、悪くなった。）嘉助は胸をどきどきさせました。

草がからだを曲げて、パチパチ云ったり、さらさら鳴ったりしました。霧が殊に滋しげくなつて、着物はすっきりしめつてしまいました。

嘉助は咽喉のど一杯叫びました。

「一郎、一郎、こっちさ来う。」

ところが何の返事も聞こえません。黒板から降る白墨の粉のような、暗い冷たい霧の粒が、そこら一面踊りまわり、あたりが俄にシインとして、陰気に陰気になりました。草からは、もう雫しずくの音がポタリポタリと聞こえて来ます。

嘉助はもう早く、一郎たちの所へ戻ろうとして急いで引っ返しました。けれどもどうも、それは前に来た所とは違っていたようでした。第一、薊があんまり沢山ありましたし、それに草の底にさつき無かった岩かけが、度々ころがっていました。そしてとうとう聞いたこともない大きな谷が、いきなり眼の前に現われました。すすきが、ざわざわざわつと鳴り、向うの方は底知れずの谷のように、霧の中に消えているではありませんか。

風が来ると、芒すすきの穂は細い沢山の手を一ぱいのばして、忙せわしく振って、

「あ、西さん、あ、東さん、あ西さん、あ南さん、あ、西さん。」なんて云っている様でした。

嘉助はあんまり見つともなかつたので、目を瞑つぶって横を向きました。そして急いで引っ返しました。小さな黒い道が、いきなり草の中に出て来ました。それは沢山の馬の蹄ひづめの痕で出来上っていたのです。嘉助は、夢中で、短い笑い声をあげて、その道をぐんぐん歩きました。

けれども、たよりのないことは、みちのはばが五寸ぐらいになつたり、又三尺ぐらいに變つたり、おまけに何だかぐるっと廻っているように思われました。そして、

とうとう、大きinateつぺんの焼けた栗の木の前まで来た時、ぼんやり幾つにも岐わかれてしまいました。

其処は多分は、野馬の集まり場所であつたでしょう。霧の中に円い広場のように見えるのです。

嘉助はがっかりして、黒い道を又戻りはじめました。知らない草穂くさぼが静かにゆらぎ、少し強い風が来る時は、どこかで何か合図をしてでも居るように、一面の草が、それ来たつとみなからだを伏せて避けました。

空が光ってキインキインと鳴っています。それからすぐ眼の前の霧の中に、家の形の大きな黒いものがあらわ

れました。嘉助はしばらく自分の眼を疑って立ちどまっていたが、やはりどうしても家らしかったので、こわごわもつと近寄って見ますと、それは冷たい大きな黒い岩でした。

空がくるくるくるっと白く揺らぎ、草がバラツと一度に雫を払いました。

（間違つて原の向う側へ下りれば、又三郎もおれももう死ぬばかりだ）と嘉助は、半分思う様に半分つぶやくようにしました。それから叫びました。

「一郎、一郎、居るが。一郎。」

又明るくなりました。草がみな一斉に悦びよろこの息をします。

「伊佐戸いさどの町の、電気工夫の童わらわすあ、山男に手足い縛らえてたふうだ。」といつか誰かたれの話した語ことばが、はつきり耳に聞こえて来ます。

そして、黒い路が、俄に消えてしまいました。あたりがほんのしばらくしいんとなりました。それから非常に強い風が吹いて来ました。

空が旗のようにぱたぱた光って翻り、火花がパチパチパチツと燃えましました。嘉助はとうとう草の中に倒れてね

むってしまいました。

そんなことはみんなどこかの遠いできごとのようなでした。

もう又三郎がすぐ眼の前に足を投げだしてだまって空を見あげているのです。いつかいつもの鼠いろの上着の上にガラスのマントを着ているのです。それから光るガラスの靴をはいているのです。

又三郎の肩には栗の木の影が青く落ちていきます。又三郎の影は、また青く草に落ちていきます。そして風がどんどんどんどん吹いているのです。又三郎は笑いもしなけ

れば物も云いません。ただ小さな唇を強そうにきつと結んだまま黙ってそらを見えています。いきなり又三郎はひらつとそらへ飛びあがりました。ガラスのマントがキラキラ光りました。ふと嘉助は眼をひらきました。灰いろの霧が速く速く飛んでいます。

そして馬がすぐ眼の前へのっそりと立っていたのです。その眼は嘉助を恐れて横の方を向いていました。

嘉助ははね上がって馬の名札を押えました。そのうしろから三郎がまるで色のなくなった唇をきつと結んでこっちへ出てきました。嘉助はぶるぶるふるえました。

「おうい。」霧の中から一郎の兄さんの声がしました。雷もごろごろ鳴っています。

「おおい、嘉助。居るが。嘉助。」一郎の声もしました。嘉助はよろこんでとびあがりました。

「おおい。居る、居る。一郎。おおい。」

一郎の兄さんと一郎が、とつぜん、眼の前に立ちました。嘉助は俄かに泣き出しました。

「探したぞ。危なかつたぞ。すっかりぬれだな。どう。」一郎の兄さんはなれた手付きで馬の首を抱いてもってきたくつわをすばやく馬のくちにはめました。

「さあ、あべさ。」

「又三郎びっくりしたべあ。」一郎が三郎に云いました。三郎はだまって、やっぱりきつと口を結んでうなずきました。

みんなは一郎の兄さんについて、緩い傾斜を、二つ程昇り降りしました。それから、黒い大きな路について、暫らく歩きました。

稲光りが二度ばかり、かすかに白くひらめきました。草を焼く匂がして、霧の中を煙がぼうっと流れています。

一郎の兄さんが叫びました。

「おじいさん。居だ、居だ。みんな居だ。」

おじいさんは霧の中に立っていて、

「ああ心配した、心配した。ああ好えがった。おお嘉助。

寒がべあ、さあ入れ。」と云いました。嘉助は一郎と同じようにやはりこのおじいさんの孫なようでした。

半分に焼けた大きな栗の木の根もとに、草で作った小さな囲いがあつて、チヨロチヨロ赤い火が燃えていました。

一郎の兄さんは馬を櫓ならの木につなぎました。馬もひひんと鳴いています。

「おおむぞやな。な。何ぼが泣いだがな。そのわろは金山掘りのわろだな。さあさあみんな、団子たべろ。食べる。な。今こつちを焼ぐがらな。全体何処まで行ってだった。」

「笹長根ささながねのおり口だ。」と一郎の兄さんが答えました。

「危いがあった。危いがあった。向うさ降りだら馬も人もそれっ切りだったぞ。さあ嘉助。団子喰べる。このわろもたべろ。さあさあ、こいづも食べる。」

「おじいさん。馬置いてくるが。」と一郎の兄さんが云いました。

「うんうん。牧夫来るとまだやがましがらな、したどもも少し待で。又すぐ晴れる。ああ心配した。俺も虎こ山の下まで行って見で来た。はあ、まんつ好^えがった。雨も晴れる。」

「今朝ほんとに天気好^えがったのにな。」

「うん。又好^ゆくなるさ、あ、雨漏って来たな。」

一郎の兄さんが出て行きました。天井がガサガサガサ云います。おじいさんが、笑いながらそれを見上げました。

兄さんが又はいって来ました。

「おじいさん。明るくなつた。雨あ霽れだ。」

「うんうん。そうが。さあみんなよつく火にあだれ、おら又草刈るがらな。」

霧がふつと切れましました。日の光がさつと流れて入りましました。その太陽は、少し西の方に寄ってかかり、幾片かの蠟ろうのような霧が、逃げおくれて仕方なしに光りました。

草からは霰しよくがきらきら落ち、総ての葉も茎も花も、今年の終りの陽の光を吸っています。

はるかな西の碧あおい野原は、今泣きやんだようにまぶしく笑い、向うの栗の木は、青い後光を放ちました。みんな

なはもう疲れて一郎をさきに野原をおりました。湧水のところで三郎はやっぱりだまっけてきつと口を結んだままみんなに別れてじぶんだけお父さんの小屋の方へ帰って行きました。

帰りながら嘉助が言いました。

「あいづやっぱり風の神だぞ。風の神の子っ子だぞ。あそごさ二人して巢食ってるんだぞ。」

「そだないよ。」一郎が高く云いました。

九月五日

次の日は朝のうちは雨でしたが、二時間目からだんだん明るくなって三時間目の終りの十分休みにはとうとうすっかりやみ、あちこちに削ったような青ぞらもできて、その下をまっ白な鱗雲うろこぐもがどんどん東へ走り、山の萱かやからも栗の木からも残りの雲が湯気のように立ちました。「下がさがったら葡萄蔓ぶどうづるとりに行かないが。」耕助が嘉助にそつと云いました。

「行く行く。又三郎も行がないが。」嘉助がさそいまし

た。耕助は、

「わあい、あそご又三郎さ教えるやないじや。」と云いました。が三郎は知らないで、

「行くよ。ぼくは北海道でもとつたぞ。ぼくのお母さんは樽たるへ二つつ漬けたよ。」と云いました。

「葡萄とりにおらも連れでがなが。」二年生の承吉も云いました。

「わがないじや。うなどさ教えるやないじや。おら去年な新しいどご目附だじや。」

みんなは学校の済むのが待ち遠しかったのでした。五

時間目が終わると、一郎と嘉助と佐太郎と耕助と悦治と又三郎と六人で学校から上流かみの方へ登って行きました。少し行くと一けんの藁わらやねの家があつて、その前に小さなたばこ畑がありました。たばこの木はもう下の方の葉をつんであるので、その青い茎が林のようにきれいにならんでいかにも面白そうでした。

すると又三郎はいきなり、

「何だい、この葉は。」と云いながら葉を一枚むしつて一郎に見せました。すると一郎はびっくりして、

「わあ、又三郎、たばこの葉とるづど専売局にうんと叱

られるぞ。わあ、又三郎何^なしてとった。」と少し顔いろを悪くして云いました。みんなも口々に云いました。

「わあい。専売局であ、この葉一枚ずつ数えで帖面さつ
けでるだ。おら知らないぞ。」

「おらも知らないぞ。」

「おらも知らないぞ。」みんな口をそろえてはやしまし
た。

すると三郎は顔をまっ赤にして、しばらくそれを振り
廻わして何か云おうと考えていましたが、

「おら知らないでとったんだい。」と怒ったように云い

ました。

みんなは怖そうに、誰か見ていないかというように向うの家を見ました。たばこばたけからもうもうとあがる湯気の向うで、その家はしいんとして誰も居たようではありませんでした。

「あの家一年生の小助の家だじやい。」嘉助が少しなだめるように云いました。ところが耕助ははじめからじぶんの見つけた葡萄藪^{やぶ}へ、三郎だのみんなあんまり来て面白くなかったもんですから、意地悪くもいちど三郎に云いました。

「わあ、又三郎なんぼ知らないたつてわがないんだじや。わあい、又三郎もどの通りにしてまゆんだであ。」
又三郎は困ったようにしてまたしばらくだまっ
ていましたが、

「そんなら、おいら此処へ置いてくからいいや。」と云いながらさっきの木の根もとへそつとその葉を置きました。すると一郎は、

「早くあべ。」と云つて先にたつてあるきだしましたのでみんなもついて行きましたが、耕助だけはまだ残つて、
「ほう、おら知らないぞ。ありや、又三郎の置いた葉、

あすごにあるじやい。」なんて云っているのですが、みんながどんどん歩きだしたので耕助もやっとなついて来ました。

みんなは萱の間の小さなみちを山の方へ少しのぼりますと、その南側に向いた窪みに栗の木があちこち立って、下には葡萄がもくもくした大きな藪になっていました。

「ここおれ見っ附だのだがらみんなあんまりとるやないぞ。」耕助が言いました。

すると三郎は、

「おい栗の方をとるんだい。」といって石を拾って一

つの枝へ投げました。青いいがが一つ落ちました。

又三郎はそれを棒きれで剥むいて、まだ白い栗を二つとりました。みんなは葡萄の方へ一生けん命でした。

そのうち耕助がも一つの藪へ行こうと一本の栗の木の下を通りますと、いきなり上から雫が一ぺんにざっと落ちてきましたので、耕助は肩からせなかから水へはいつたようになりました。耕助は愕おどろいて口をあいて上を見ましたら、いつか木の上に又三郎がのぼっていて、なんだか少しわらいながらじぶんも袖ぐちで顔をふいていたのです。

「わあい、又三郎何する。」耕助はうらめしそうに木を見あげました。

「風が吹いたんだい。」三郎は上でくつくつわらいながら云いました。

耕助は樹の下をはなれてまた別の藪で葡萄をとりはじめました。もう耕助はじぶんでも持てないくらいあちこちへためていて、口も紫いろになってまるで大きく見えました。

「さあ、この位持って戻らないが。」一郎が云いました。「おら、もっと取ってぐじや。」耕助が云いました。

そのとき耕助はまた頭からつめたい雫をざあつとかぶりしました。耕助はまたびっくりしたように木を見上げましたが今度は三郎は樹の上には居ませんでした。

けれども樹の向う側に三郎の鼠いろのひじも見えていましたし、くつくつ笑う声もしましたから、耕助はもうすっかり怒ってしまいました。

「わあい又三郎、まだひとさ水掛けだな。」

「風が吹いたんだい。」

みんなはどっと笑いました。

「わあい又三郎、うなそごで木ゆすったけあなあ。」

みんなはどつとまた笑いしました。

すると耕助はうらめしそうにしばらくだまって三郎の顔を見ながら、

「うあい又三郎汝うななどあ世界になくてもいなあい。」
すると又三郎はずるそうに笑いしました。

「やあ耕助君失敬したねえ。」

耕助は何かもつと別のことを云おうと思いましたがあんまり怒ってしまつて考え出すことが出来ませんでしたので又同じように叫びました。

「うあい、うあいだが、又三郎、うなみだいな風など世

界中になくてもいいなあ、うわあい。」

「失敬したよ、だってあんまりきみもぼくへ意地悪をするもんだから。」又三郎は少し眼をパチパチさせて気の毒そうに云いました。けれども耕助のいかりは仲々解けませんでした。そして三度同じことをくりかえしたのです。

「うわい、又三郎風などあ世界中に無くてもいいなあ、うわい。」

すると又三郎は少し面白くなつた様でまたくつつくつ笑いだしてたずねました。

「風が世界中に無くつてもいいってどう云うんだい。いと箇条をたてていってごらん。そら」又三郎は先生みたいな顔つきをして指を一本だしました。耕助は試験の様だしつまらないことになったと思つて大變口惜しかつたのですが仕方なくしばらく考えてから云いました。

「汝^{うな}など悪戯^{いたずら}ばりさな、傘ぶつ壊^かしたり。」

「それからそれから」又三郎は面白そうに一足進んで云いました。

「それがら樹折つたり転覆^{おっけあ}したりさな」

「それから、それからどうだい」

「家もぶつ壊かさな」

「それからそれから、あとはどうだい」

「あかしも消さな、」

「それからあとは？　それからあとは？　どうだい」

「シャツもとばさな」

「それから？　それからあとは？　あとはどうだい。」

「笠もとばさな。」

「それからそれから」

「それなら、うう電信ばしらも倒さな」

「それから？　それから？　それから？」

「それがら屋根もとばさな」

「アアハハハ、屋根は家のうちだい。どうだいまだあるかい。それから、それから？」

「それだから、うう、それだからランプも消さな。」

「アアハハハハ、ランプはあかしのうちだい。けれどそれだけかい。え、おい。それから？　それからそれから。」

耕助はつまってしまいました。大抵もう云ってしまつたのですからいくら考えてももう出ませんのでした。又三郎はいよいよ面白そうに指を一本立てながら

「それから？　それから？　ええ？　それから？」と云

うのでした。

耕助は顔を赤くしてしばらく考えてからやっとなんて答へました。

「風車もぶつ壊かさな」

すると又三郎はこんどこそはまるで飛び上って笑ってしまいました。みんなも笑いました。笑って笑って笑いました。

又三郎はやっと笑うのをやめて云いました。

「そらごらんとうとう風車などを云っちゃったろう。風車なら風を悪く思っちゃいないんだよ。勿論時々こわす

こともあるけれども、廻してやる時のほうがずっと多いんだ。風車ならちつとも風を悪く思っていないんだ。それに第一お前のさつきからの数えようはあんまりおかしいや。うう、うう、でばかりいたんだらう。おしまいにとうとう風車なんか数えちゃった。ああおかしい。」又三郎は又^{なみだ}泪の出るほど笑いました。耕助もさつきからあんまり困ったために怒っていたのもだんだん忘れて来ました。そしてつい又三郎と一しよに笑い出してしまったのです。すると又三郎もすっかりきげんを直して、「耕助君、いたずらをして済まなかったよ」と云いまし

た。

「さあそれであ行くべな。」と一郎は云いながら又三郎にぶどうを五ふさばかりくれました。又三郎は白い栗をみんなに二つずつ分けました。そしてみんなは下のみちまでいっしよに下りてあとはめいめいのうちへ帰ったのです。

九月七日

次の朝は霧がじめじめ降って学校のうしろの山もぼん

やりしか見えませんでした。ところがきょうも二時間目ころからだんだん晴れて間もなく空はまっ青になり日はかんかん照ってお午ひるになって三年から下が下ってしまうとまるで夏のように暑くなってしまいました。

ひるすぎは先生もたびたび教壇で汗を拭き四年生の習字も五年生六年生の図画もまるでむし暑くて書きながらうとうとするのでした。

授業が済むとみんなはすぐ川下の方へそろって出掛けました。嘉助が

「又三郎水泳ぎに行かないが。小さいやづど今ころみん

な行ってるぞ。」と云いましたので又三郎もついて行きました。

そこはこの前上の野原へ行つたところよりも少し下流で右の方からも一つの谷川がはいつて来て少し広い河原になりそのすぐ下流は巨おおきなさいかちの樹の生えた崖になっているのでした。

「おおい。」とさきに来ていゝこともらうがはだかで両手をあげて叫びました。一郎やみんなは、河原のねむの木の間をまるで徒競走のように走っていきなりきものをぬぐとすぐどぶんどぶんと水に飛び込んで両足をかわるが

わる曲げて、だあんだあんと水をたたくようにしながら斜めにならんで向う岸へ泳ぎはじめました。

前に居たこどもらもあとから追いついて泳ぎはじめました。

又三郎もきものをぬいでみんなのあとから泳ぎはじめましたが、途中で声をあげてわらいました。

すると向う岸についた一郎が髪をあざらしのようにして唇を紫にしてわくわくふるえながら、

「わあ又三郎、何^なしてわらった。」と云いました。又三郎はやっぱりふるえながら水からあがって、

「この川冷たいなあ。」と云いました。

「又三郎何してわらった？」一郎はまたききました。

「おまえたちの泳ぎ方はおかしいや。なぜ足をだぶだぶ鳴らすんだい。」と云いながらまた笑いました。

「うわあい」と一郎は云いましたが何だかきまりが悪くなつたように

「石取りさないが。」と云いながら白い円い石をひろいました。

「するする」こどもらがみんな叫びました。

おれそれでああの木の上から落とすがらな。

と一郎は云いながら崖の中ごろから出ているさいかちの木へするする昇って行きました。そして、

「さあ落とすぞ。一二三。」と云いながらその白い石をどぶーん、と淵へ落としました。みんなはわれ勝ちに岸からまっさかさまに水にとび込んで青白いらっこのような形をして底へ潜って、その石をとろうとしました。けれどもみんな底まで行かないに息がつまって浮かびだして来て、かわるがわるふうとそこらへ霧をふきました。

又三郎はじつとみんなのするのを見ていました。みんなが浮かんできてからじぶんもどぶんとはいって行き

ました。けれどもやっぱり底まで届かずに浮いてきたのでみんなはどっと笑いました。そのとき向うの河原のねむの木のところを大人が四人、肌ぬぎになつたり網をもつたりしてこっちへ来るのでした。

すると一郎は木の上でまるで声をひくくしてみんなに叫びました。

「おお、発破だぞ。知らないふりしてろ。石とりやめで早くみんな下流^{しも}さがれ。」

そこでみんなは、なるべくそつちを見ないふりをしながらいっしょに下流^{しも}の方へ泳ぎました。一郎は、木の上

で手を額にあてて、もう一度よく見きわめてから、どぶんと逆まに淵へ飛びこみました。それから水を潜くぐって、一ぺんにみんなへ追いついたのです。

みんなは、淵の下流しもの、瀬になったところに立ちました。

「知らないふりして遊んでろ。みんな。」一郎が云いました。みんなは、砥石とをひろったり、せきれいを追ったりして、発破のことなぞ、すこしも気がつかないふりをしていました。

すると向うの淵の岸では、下流の坑夫をしていた庄助

が、しばらくあちこち見まわしてから、いきなりあぐらをかいて砂利の上へ座ってしまいました。それからゆつくり、腰からたばこ入れをとって、きせるをくわえて、ぱくぱく煙をふきだしました。奇体だと思っていましたら、また腹かけから、何か出しました。

「発破だぞ、発破だぞ。」とみんな叫びました。一郎は、手をふってそれをとめました。庄助は、きせるの火を、しずかにそれへうつしました。うしろに居た一人は、すぐ水に入って、網をかまえました。庄助は、まるで落ちついて、立って一あし水にはいると、すぐその持ったも

のを、さいかちの木の下のところへ投げこみました。するとまもなく、ぼおというようなひどい音がして、水はむくつと盛りあがり、それからしばらく、そこらあたりがきいんと鳴りました。向うの大人たちはみんな水へはいりました。

「さあ、流れて来るぞ。みんなとれ。」と一郎が云いました。まもなく、耕助は小指ぐらいの茶いろなかじかが、横向きになって流れて来たのをつかみましたしそのうしろでは嘉助が、まるで瓜をすするときのような声を出しました。それは六寸ぐらいある鮎をとって、顔をまっ赤

にしてよろこんでいたのです。それからみんなとってわあわあよろこびました。

「だまってる、だまってる。」一郎が云いました。

そのとき向うの白い河原を肌ぬぎになったり、シャツだけ着たりした大人が、五六人かけて来ました。そのうしろからは、ちようと活動写真のように、一人の網シャツを着た人が、はだか馬に乗って、まっしぐらに走って来ました。みんな発破の音を聞いて見に来たのです。

庄助は、しばらく腕を組んでみんなののを見ていました、

「さっぱり居ないな。」と云いました。すると又三郎がいつの間にか庄助のそばへ行っていました。

そして中位の鮒を二疋、「魚返すよ。」といつて河原へ投げるように置きました。すると庄助が、

「なんだこの童わらすあ、きたいなやづだな。」と云いながらじろじろ又三郎を見ました。

又三郎はだまってこっちへ帰ってきました。庄助は変な顔をしてみえています。みんなはどつとわらいました。

庄助はだまって、また上流かみへ歩きだしました。ほかのおとなたちもついて行き網シャツの人は、馬に乗って、

またかけて行きました。耕助が泳いで行って三郎の置いて来た魚を持ってきました。みんなはそこでまたわらいました。

「発破かけたら、雑魚撒かせ。」嘉助が、河原の砂っぱの上で、びよんぴよんはねながら高く叫びました。

みんなは、とった魚を、石で囲んで、小さな生州いけすをこしらえて、生き返って、ももう遁にげて行かないようにして、また上流かみのさいかちの樹へのぼりはじめました。ほんとうに暑くなつて、ねむの木もまるで夏のようにぐつたり見えませんでしたし、空もまるで、底なしの淵のようにな

りました。

そのころ誰たれかが、

「あ、生州、打ぶ壊こわすところだぞ。」と叫よびました。見ると、一人の変に鼻の尖とがった、洋服を着てわらじをはいた人が、手にはステツキみたいなものをもって、みんなの魚を、ぐちやぐちや搔かきまわしているのです。

「あ、あいづ専売局だぞ。専売局だぞ。」佐太郎が云いました。

「又三郎、うなのとった煙草の葉めつけたんだで、うな、連れでぐさ来たぞ。」嘉助が云いました。

「何んだい。こわくないや。」又三郎はきつと口をかんで云いました。

「みんな又三郎のごと囲んでろ囲んでろ。」と一郎が云いました。

そこでみんなは又三郎をさいかちの樹のいちばん中の枝に置いてまわりの枝にすつかり腰かけました。

その男はこっちへびちやびちや岸をあるいて来ました。

「来た来た来た来た来たつ。」とみんなは息をころしました。ところがその男は、別に又三郎をつかまえる風で

もなくみんなの前を通りこしてそれから淵のすぐ上流かみの
浅瀬を渡ろうとしました。それもすぐに川をわたるでも
なく、いかにもわらじや脚絆きやはんの汚なくなつたのを、その
まま洗うというふうには、もう何べんも行ったり来たりす
るもんですから、みんなはだんだん怖くなくなりました
が、その代り気持ちが悪くなつて来ました。そこで、と
うとう、一郎が云いました。

「お、おれ先に叫ぶから、みんなあとから、一二三で叫
ぶこだ。いいか。」

あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生せんせ云うでないか。一、二い、三。」

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生云うでないか。」

その人は、びっくりしてこっちを見ましたけれども、何を云ったのか、よくわからないというようすでした。そこでみんなはまた云いました。

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生、云うでないか。」

鼻の尖った人は、すばすばと、煙草を吸うときのような口つきで云いました。

「この水呑むのか、ここらでは。」

「あんまり川をにごすなよ、

いつでも先生云うでないか。」

鼻の尖った人は、少し困ったようにして、また云いまして。

「川をあるいてわるいのか。」

「あんまり川をにごすなよ、

いつでも先生云うでないか。」

その人は、あわてたのをごまかすように、わざとゆっくり、川をわたって、それからアルプスの探検みたいな

姿勢をとりながら、青い粘土と赤砂利の崖をななめにのぼって、崖の上のたばこ畠へはいつてしまいました。

すると又三郎は、

「何だい、ぼくを連れにきたんじやないや」と云いながらまっ先にどぶんと淵へとび込みました。

みんなも何だかその男も又三郎も気の毒なような、おかしながらんとした気持ちになりながら、一人ずつ木からはね下りて、河原に泳ぎついて、魚を手拭につつんだり、手にもったりして、家うちに帰りました。

九月八日

次の朝授業の前みんなが運動場で鉄棒にぶら下ったり棒かくしをしたりしていますと、少し遅れて佐太郎が何かを入れた筈はずをそつと抱えてやって来ました。

「何だ、何だ。何だ。」とすぐみんな走って行ってのぞき込みました。すると佐太郎は袖でそれをかくすようにして急いで学校の裏の岩穴のところへ行きました。みんなはいよいよあとを追って行きました。一郎がそれをのぞくと思わず顔いろを変えました。それは魚の毒もみに

つかう山椒さんしょうの粉で、それを使うと発破と同じように
査に押えられるのでした。ところが佐太郎はそれを岩穴
の横の萱かやの中へかくして、知らない顔をして運動場へ帰
りました。

そこでみんなはひそひそ時間になるまでひそひそその
話ばかりしていました。

その日も十時ごろからやっぱり昨日のように暑くなり
ました。みんなはもう授業の済むのばかり待っていました
た。二時になって五時間目が終ると、もうみんな一目散
に飛びだしました。佐太郎も又また策けしをそつと袖でかくして

耕助だのみんなに囲まれて河原へ行きました。又三郎は嘉助と行きました。みんなは町の祭のときの瓦斯ガスのような匂のむっとする、ねむの河原を急いで抜けて、いつものさいかち淵に着きました。すっかり夏のような立派な雲の峰が、東でむくむく盛りあがり、さいかちの木は青く光って見えました。

みんな急いで着物をぬいで、淵の岸に立つと、佐太郎が一郎の顔を見ながら云いました。

「ちゃんと一列にならべ。いいか。魚浮いて来たら、泳いで行ってとれ。とった位や与るぞ。いいか。」

小さなこどもらは、よろこんで顔を赤くして、押しあつたりしながら、ぞろつと淵を囲みました。ペ吉きちだの三四人はもう泳いで、さいかちの木の下まで行って待っていました。

佐太郎が、大威張りで、上流かみの瀬に行つて箆をじゃぶじゃぶ水で洗いました。みんなしいんとして、水をみつめて立っていました。又三郎は水を見ないで、向うの雲の峰の上を通る黒い鳥を見ていました。一郎も河原に座つて石をこちこち叩いていました。ところがそれからよほどたつても、魚は浮いて来ませんでした。

佐太郎は大へんまじめな顔で、きちんと立って水を見ていました。昨日発破をかけたときなら、もう十疋もとっていたんだと、みんなは思いました。またずいぶんしばらくみんなしいんとして待ちました。けれどもやっぱり魚は一ぴきも浮いて来ませんでした。

「さっぱり魚、浮かばないな。」耕助が叫びました。佐太郎はびくつとしましたけれども、まだ一ところに水を見ていました。

「魚さっぱり浮かばないな。」ペ吉が、また向うの木の下で云いました。するともうみんなは、がやがやと云い

出して、みんな水に飛び込んでしまいました。

佐太郎は、しばらくきまり悪そうに、しやがんで水を見ていましたけれど、とうとう立って、

「鬼っこしないか。」と云いました。

「する、する。」みんなは叫んで、じやんけんをするために、水の中から手を出しました。泳いでいたものは、急いでせいの立つところまで行って手を出しました。一郎も河原から来て手を出しました。そして一郎は、はじめに、昨日あの変な鼻の尖った人の上^{のぼ}って行った崖の下、青いぬるぬるした粘土のところを根っこにきめました。

た。そこに取りついていれば、鬼は押えることができないというのでした。それから、はさみ無しの一人まけかちで、じゃんけんをしました。ところが悦治はひとりはさみを出したので、みんなにうんとはやされたほかに鬼になった。悦治は、唇を紫いろにして、河原を走って、喜作を押えたので、鬼は二人になりました。それからみんなは、砂っぱの上や淵を、あっちへ行ったり、こっちへ来たり、押えたり押えられたり、何べんも鬼っこをしました。

しまいにととうとう、又三郎一人が鬼になりました。又三

郎はまもなく吉郎をつかまえました。みんなは、さいかちの木の下に居てそれを見ていました。すると又三郎が、「吉郎君、きみは上流かみから追って来るんだよ。いいか。」と云いながら、じぶんはだまって立って見ていました。吉郎は、口をあいて手をひろげて、上流かみから粘土の上を追って来ました。みんなは淵へ飛び込む仕度をしました。一郎は楊やなぎの木にのぼりました。そのとき吉郎が、あの上流かみの粘土が、足についていたためにみんなの前ですべてころんでしまいました。みんなは、わあわあ叫んで、吉郎をはねこえたり、水にはいたりして、

上流かみの青い粘土の根に上ってしまいました。

「又三郎、来こ。」嘉助は立って、口を大きくあいて、手をひろげて、又三郎をばかにしました。すると又三郎は、さつきからよっほど怒っていたと見えて、

「ようし、見ているよ。」と云いながら、本気になって、ざぶんと水に飛び込んで、一生けん命、そっちの方へ泳いで行きました。

又三郎の髪の毛が赤くてばしやばしやしているのにあんまり永く水につかって唇もすこし紫いろなので子どもらは、すっかり恐がってしまいました。第一、その粘土

のところはせまくて、みんながはいれなかつたのにそれに大へんつるつるすべる坂になつていましたから、下の方の四五人などは、上の人につかまるようにして、やつと川へすべり落ちるのをふせいでいたのです。一郎だけが、いちばん上で落ちついて、さあ、みんな、とか何とか相談らしいことをはじめました。みんなもそこで、頭をあつめて聞いています。又三郎は、ぼちやぼちや、もう近くまで行きました。みんなは、ひそひそはなしています。すると又三郎は、いきなり両手で、みんなへ水をかけ出しました。みんながばたばた防いでいましたら、

だんだん粘土がすべって来て、なんだかすこうし下へずれたようになりました。又三郎はよろこんで、いよいよ水をはねとばしました。するとみんなは、ぼちやんぼちやんと一度にすべって落ちました。又三郎は、それを片っぱしからつかまえました。一郎もつかまりました。嘉助がひとり、上をまわって泳いで遁にげましたら、又三郎はすぐに追い付いて、押えたほかに、腕をつかんで四五へんぐるぐる引っぱりまわしました。嘉助は、水を呑んだと見えて、霧をふいて、ごぼごぼむせて、

「おいらもうやめた。こんな鬼っこもうしない。」と云

いました。小さな子どもらはみんな砂利に上ってしまいました。又三郎は、ひとりさいかちの樹の下に立ちました。

ところが、そのときはもう、そらがいつぱいの黒い雲で、楊も変に白っぽくなり、山の草はしんしんとくらくなりそこらは何とも云われない、恐ろしい景色にかわっていました。

そのうちに、いきなり上の野原のあたりで、ごろごろと雷が鳴り出しました。と思うと、まるで山つなみのような音がして、一ぺんに夕立がやって来ました。風

までひゅうひゅう吹きだしました。淵の水には、大きなぶちぶちがたくさんできて、水だか石だかわからなくなつてしまいました。みんなは河原から着物をかかえて、ねむの木の下へ遁げこみました。すると又三郎も何んだかはじめて怖くなったと見えてさいかちの木の下からどぼんと水へはいつてみんなの方へ泳ぎだしました。

すると、誰れたれともなく

「雨はざっこざっこ雨三郎

風はどっこどっこ又三郎」

と叫んだものがありました。みんなもすぐ声をそろえて

叫びました。

「雨はざっこざっこ雨三郎

風はどっこどっこ又三郎」

すると又三郎はまるであわてて、何かに足をひっぱられるようにして淵からとびあがって一目散にみんなのところを走ってきてがたがたふるえながら

「いま叫んだのはおまえらだちかい。」とききました。

「そでない、そでない。」みんないっしょに叫びました。

ペ吉がまた一人出て来て、

「そでない。」と云いました。又三郎は、気味悪そうに

青いくるみも、吹きとばせ

すっぱいかりんも吹きとばせ

どっどど　どどうど　どどうど　どどう

どっどど　どどうど　どどうど　どどう

先頃せんころ又三郎から聞いたばかりのあの歌を一郎は夢の中で又きいたのです。

びっくりして跳ね起きて見ると外ではほんとうにひどく風が吹いて林はまるで吼ほえるよう、あけがた近くちようちんばこの青ぐろい、うすあかりが障子や棚の上のち提灯箱や家中一ぱいでした。一郎はすばやく帯をしてそして下駄をは

いて土間を下り馬屋の前を通って潜^{くぐ}りをあけましたら風がつめたい雨の粒と一緒にどつと入って来ました。

馬屋のうしろの方で何か戸がばたつと倒れ馬はぶるるつと鼻を鳴らしました。一郎は風が胸の底まで滲^しみ込んだように思つてはあと強く息を吐きました。そして外へかけだしました。外はもうよほど明るく土はぬれて居りました。家の前の栗の木の変に青く白く見えてそれがまるで風と雨とで今洗濯をするとでも云う様に烈しくもまれていました。青い葉も幾枚も吹き飛ばされ、ちぎられた青い栗のいがは黒い地面にたくさん落ちていました

た。空では雲がけわしい灰色に光りどンドンどンドン北の方へ吹きとばされていきました。遠くの方の林はまるで海が荒れているようにごんごんと鳴ったりざつと聞こえたりするのです。一郎は顔いっぱい冷たい雨の粒を投げつけられ風に着物をもつて行かれそうになりながらだまってその音をききすましじつと空を見上げました。

すると胸がさらさらと波をたてるように思いました。けれども又じつとその鳴って吠ほえてうなつてかけて行く風をみていますと今度は胸がどかどかとなつてくるので

した。昨日まで丘や野原の空の底に澄みきってしんとしていた風が今朝夜あけ方俄かに一斉に斯う動き出してどんどんどんどんタスカロラ海床の北のはじをめがけて行くことを考えますともう一郎は顔がほてり息もはあ、はあ、なって自分までが一緒に空を翔けて行くような気持ちになつて胸を一ぱいはって息をふつと吹きました。

「ああひで風だ。今日は煙草も粟もすつかりやらえらる。」と一郎のおじいさんが潜りのところに立ってじつと空を見えています。一郎は急いで井戸からバケツに水を一ぱい汲んで台所をぐんぐん拭きました。それから金だ

らいを出して顔をぶるぶる洗うと戸棚から冷たいごはん
と味噌をだして、まるで夢中でざくざく喰べました。

「一郎、いまお汁つけできるから少し待ってだらよ。何なして
今朝そつたに早く学校へ行がないやないがべ。」

お母さんは馬にやる「一字空白」を煮るかまどに木を
入れながらききました。

「うん。又三郎は飛んでつたがもしれないもや。」

「又三郎って何だてや。鳥こだてが。」

「うん。又三郎って云うやづよ。」一郎は急いでごはん
をしまうと椀をこちこち洗って、それから台所の釘にか

けてある油合羽あぶらがっぱを着て下駄はもってほだしで嘉助をさそいに行きました。嘉助はまだ起きたばかりで

「いまごはんをたべて行くがら。」と云いましたので一郎はしばらくうまやの前で待っていました。

まもなく嘉助は小さいみの蓑を着て出てきました。

烈しい風と雨にぐしよぬれになりながら二人はやっと学校へ来ました。昇降口からはいつて行きますと教室はまだしいんとしていましたがところどころの窓のすきまから雨が板にはいつて板はまるでざぶざぶしていました。一郎はしばらく教室を見まわしてから

「嘉助、二人して水掃ぐべな。」と云ってしゆる箒ほうきをもつて来て水を窓の下の孔あなへはき寄せていました。

するともう誰たれか来たのかというように奥から先生が出てきました。がふしぎなことは先生があたり前の単衣ひとえをきて赤いうちわをもっているのです。

「たいへん早いですね。あなた方二人で教室の掃除をしているのですか。」先生がききました。

「先生お早うございます。」一郎が云いました。

「先生お早うございます。」と嘉助も云いましたが、す
ぐ

「先生、又三郎今日来るのすか。」とききました。

先生はちよつと考えて、

「又三郎って高田さんですか。ええ、高田さんは昨日お父さんといっしょにもう外ほかへ行きました。日曜なのでみなさんにご挨拶するひまがなかつたのです。」

「先生飛んで行ったのすか。」嘉助がききました。

「いいえ、お父さんが会社から電報で呼ばれたのです。お父さんはもいちどちよつとこつちへ戻られるそうです。高田さんはやっぱり向うの学校に入るのだそうです。向うにはお母さんも居られるのですから。」

「何^なして会社で呼ばったべす。」と一郎がききました。

「こここのモリブデンの鉋脈は当分手をつけないことになった為なそうです。」

「そうだないな。やっぱりあいづは風の又三郎だったな。」

嘉助が高く叫びました。宿直室の方で何かごとごと鳴る音がしました。先生は赤いうちわをもつて急いでそつちへ行きました。

二人はしばらくだまっただまま相手がほんとうにどう思っているか探るように顔を見合せたまま立ちました。

風はまだやまず、窓がらすは雨つぶのために曇りながら、またがたがた鳴りました。

日本文学電子図書館

風の又三郎

著 者：宮沢賢治

制作者：宮澤一郎

底 本：「昭和文学全集 4」
小学館

平成元年4月1日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館